

## ●内閣府特命担当大臣賞●

### にちろ 日露の幸せと未来への創造

つかやまりこ  
津嘉山 理子



しょうがく  
沖縄尚学高等学校附属中学校2年(沖縄県)

「両国で共存できないか」

去年、北方領土ビザなし交流会に参加し、たまたまなく込み上げてきたこの思いを胸に、私は二度目の交流事業に臨みました。

下船するなり、青く広がる大空が、光輝く海が、心地よくなびく潮風が、私を出迎え、国後島の豊かさを、全身で感じました。

国後島の空や太陽は、海、そして風は、見てきたでしょう。島すべてを失った75年前の出来事を。強制的に退去させられた光景を。元島民達の悲しみを。そして75年という月日の流れを。何を思い何を感じたのか。

私は、現地の資料館を訪れ、歴史上異なることが伝えられている事実を知り、複雑な思いになりました。しかし、資料館には、沖縄の紅型や着物も飾られており、「私たちの文化を受け入れてくれている」驚きと喜びでいっぱいになりました。

今年もホームビジット先では、盛大に歓迎してもらいました。沖縄の郷土料理クープイリチーを作ってくれていたことには、本当に感激でした。私を喜ばせようと準備してくれていたのでしょう。そんな中、仲よくなったロシア人の子と会話を楽しんでいるとき、急に彼女がこわばった表情で私に質問してきました。

「理子はロシアのことどう思う？好き？」私はこの質問に一瞬どきどきました。私が一番聞きたくても聞けなかったことを率直に質問してきたからです。

「もちろん。とっても好きだよ」と答えると、彼女は喜び、安心した様子で「よかったー」と、言いながら私を強くハグしました。

北方領土問題を抱えている両国で、相手が自分の国のことをどう思っているのか、北方四島が将来どのようになってほしいと考えているのか？気になるのは当然でしょう。私も率直な思いを聞いてみたいです。しかし、「否定されたらどうしよう」と、不安から何も切り出せませんでした。そんな中、彼女の質問を受け、交流の在り方について考えるようになりました。そこで私は提案します。

スポーツや文化の交流だけでなく、北方領土問題について両国の若者同士で、率直な思いや解決策を議論する場があってもいいのではないのでしょうか。そういった話し合いがいつか国をも動かす原動力となり、去年私が提案した共存についての具体案が深まったり、安倍総理がアプローチしている北方四島共同事業化の前進にも繋がると思います。手探りの状態から始めたビザなし交流が、今もなお継続して行われている現実。また、去年の6月の日露首脳会議で、島の観光ツアーが合意された事実。北方四島が日本人にとって身近な存在になってきている今だからこそ、ビザなし交流も次のステージに進んでみていいのではないのでしょうか？元島民の平均年齢が84歳となった今、私たち若者が積極的に動かなくてははいけないと思います。

私は忘れません。別れ際、ともに流した涙を。「また必ず会おうね」と交わした約束を。国境を越え、あらゆる利害を越え、過去の悲しみを癒やし、未来への懸け橋となるよう、新しい令和時代の新しい交流が、日露の幸せと、未来を創れることを願い、私は私にできることを、頑張っていきたいです。